

と覺しき方に雪を帶て、兀々たる山參差たり、誠に層巒ならん、信州淺間にやあらんと問に、左には非ず、淺間は是よりは見えず、おれは駒ガ嶽なりと答ふ、是を見るに、士峯より目八分に見る程なれば、至て高嶽ならめと兼て思ひしに、寛政元年東行する折柄、其麓を過るまゝに、倩眺に、實も峻嶺也、されど富士に對すべき物かはと不審かしかりしが、能く考れば、都て信濃は土地至て高し、上州越後、甲斐、美濃より入ルに、何方よりも登らずと云事なし、國中の川水皆四方へ落る、此を以其高さを知れり、故に雪深からねど、寒氣の烈しき北越に過たり、駒が嶽の事を、福島の人人に問へば、此山には拜すべき神仙もまじまねば、參詣すべき事もなし、適早魅する年、雲に登山する也、五年程前に大に旱して、近郷より登山す、我も其時登れり、福島と宮の腰の間に川有、大原川と云、此川の上に大原村と云有、是其麓也、此より二里あり、此所に權現宮有、宮官の寺も有、此時人數六十人、各壯年にて達者なるを撰て登る、麓より三里許は、樹木叢茂として、更に登るべき道なし、大木共雪に押へられて、枝撓り伏して、綱を張たる如き上を匍匐て登る、其下を覗き見れば、地形は一丈或は二丈許下に在り、各梢をつたひて宙を行也、其梢の下には雉の如くにて、尾は永からぬ鳥、幾等も群居る、土人は此鳥の名を不知、按るに是雷鳥成べし、加州白山に此鳥有て、雷を食ふ故に、此鳥を圖して家に掲置キ、處の難を避ると云習はして、今専ら世上に此事をなす、是に付て色々奇説有ども略之、都て甲州上州邊の山内には、此鳥甚多しと也、扱三里登れば、夫より上は樹木なく、硤々たる岩間を攀上る事二里にして、既に絶頂近き程に、駒石とて高十八間、長十間餘の大石有、形馬の躡たる如く、北を向て貳里、夫を過て頂上へ登る、巔に御池と稱して、小き水を湛し處有、其水深さ僅に二寸許有、六十人之者手にく、是を汲干さんとするに、一時を経て、更に盡す、兎角して下山に及ぶ、未明より上りて晝八頃也、初登山の時、是迄下りて宿すべきと思ふ所に、菜など目印をよくして置し場所へ立歸り臥す、元より寒氣堪がたければ、木の枝を折來て火